

## 資料紹介

# 明治四十五年「新愛知」新聞にみる名古屋における 坪内逍遙の動向とその周辺

濱 口 久 仁 子

明治四十五年六月、坪内逍遙は文芸協会公演のため、西下した。

この年の五月、文芸協会は第三回公演として有楽座で上演したズー  
ターマン作『故郷（マクダ）』<sup>（全）</sup>について、警察庁より今後の上演を  
禁止する通達を受けた。この事件は大きな社会問題となり、指摘を  
受けた部分―終幕のマグダの行動―を改定して関西での再演に漕ぎ  
つける事態であった。この経緯は逍遙が「『故郷』に就いて」<sup>（巻末）</sup>で詳  
らかにしている。許可がおりてのち『故郷』を関西方面で上演する  
ため、逍遙は六月十六日大阪に向かう。次いで京都に行き、その後  
十九日から五日間の御園座における名古屋公演のために当地に向  
かった。

当時の日記には名古屋滞在中の記載はないが、逍遙事典の年譜に  
は  
七月十六日 名古屋行。市原、島村、関屋、池田ら同行。  
十七日 県会議堂で講演、「何故に新しき劇を必要とするか」。

十八日 名古屋劇詩会主催による歓迎会。早大校友会による

歓迎会

十九日 文芸協会名古屋御園座講演『故郷』

二十二日 明治天皇御不例につき中止 帰途熱海に滞在して七

月三十日帰京

とある。

これが何を典拠としたのか不明であるが、おそらくは当時の新  
聞または同行者の記録によるものであろう。

これらの事項以外にも、この地で幼少期を過ごした逍遙の名古屋  
行きには、多くの動きがあった。公演の合間を縫って、生まれ故郷  
の岐阜県太田村（現美濃加茂市）も尋ねている。

今回当時の名古屋で広く読まれていた新聞『新愛知』七月発行分  
の中から、逍遙関係の記事を紹介する。

逍遙到着から帰京までの逍遙の動向を中心に、上演記録関連も含めた記事である。但し逍遙の動向を中心としたため、作品そのものに関する記事掲載は割愛した。興味深い記事も多々あるので改めて機会を設けたい。今回紹介した資料は総て日にち順に掲載したが、重複する内容のものは一件とし長文の記事は必要部分のみの抄録とした。なお検索した記事は総て最後に一覧としてまとめた。

この資料によって名古屋における逍遙の動向、上演の様子などが少しでも解明されれば幸いである。

掲載にあたっては、原文のままとしたが明らかな間違いは訂正した。旧字は新字体とし句読点は適宜施した。また判読不可の部分は■とし、『故郷（マグダ）』の公演名には、項の最初のみにルビを施した。

(注1) ドイツ自然主義派の作家スーダーマン（Herman Sudermann）、（一八五七—一九二八）の戯曲「故郷」（Heimat）を島村抱月が翻訳した作品。マグダは女主人公の名で、上演の際はこの名前と呼ばれた。

(注2) 逍遙選集第十二巻

明治四十五年七月十一日

●坪内博士歓迎会

来る十六日三十年振りにて帰郷すべき文豪坪内博士の歓迎会は、深野知事、阪本市長、奥田商業会議所会頭、大島第八高等学校校長、土井高等工業学校校長、熊谷医学千門学校長、並びに県教育会、市教

育会、経済会、倶楽部及び本社其他市内各新聞社、東西新聞支局、通信社の発起にて同日午後六時より愛知県商品陳列館楼上にて開催に決定せるが、会費一円五十銭なり。

明治四十五年七月十四日

●故郷劇は御園座 十九日より五日間公演

社会の評判に上った文芸協会「故郷（マグダ）劇」は歸に東京有楽座で十日間公演して非常なる人気を呼んだ事は既報の通りであるが、其の「故郷」劇は愈々来る十九日から廿三日まで五日間当市の御園座で毎日午後六時半から開演する事が決定したので、人気は一層高まって定めし未曾有の盛況を呈する事であろう。其の入場券（特等一円二十銭）は左の各所で取り次ぐ筈であるから此の有名な劇を見外さぬやう至急申込まれるが宜い。

『故郷』劇の筋書は既に記した通り四幕に成ったものであるが番組は次の通りである。

退職陸軍中佐シユワルツェ	土肥康元
同 中佐先妻の娘マグダ	松井須磨子
同 上娘マリイ	林千歳
同 中佐の後妻アリグステ	和泉房江
同 後妻の妹フランチスカ	都筑道子
アリグステ甥マツクス中尉	林長三
教会牧師ヘフターディング	佐々木積
参事官フオン、ケラー博士	東儀季治

休職校長ベックマン教授

退職少将フォンクレプス

同 クレプス夫人

エルリヒ夫人

シューマン夫人

シユワルツェ家女中テレゼ

西原勝彦

戸田猿仁

横川唯治

森英治郎

泉新一郎

森英治郎

明治四十五年七月十五日

●御園座の「故郷（マグダ）」劇

新たな劇界を騒がせし東京、大阪、京都に於て評判高かりし文芸協会の「故郷」劇は愈々来る十九日より五日間御園に於て花々しく開演する事となりたるが同会の公演は総て入場券制度とし各新聞社、通信社御園座前茶屋等にて既に入場券を発売しつつあり。当市に於ても非常の人気なれば観覧希望者は此際早く入場券を求むるが得策なるべし。

明治四十五年七月十六日

文藝委員の見たる坪内博士と「故郷（マグダ）」（抄録）

○文学博士 上田敏氏稿

つい近頃までは無視され軽蔑されていた文芸が漸々善かれ悪かれの勢力を認められて来て、思想界の落伍者たる恐慌論者などから遠吠えのやうな苦情を聞くに至つたのは、とにかく文芸の勝利である。狭い意味に於ての治国平天下、または勸善懲惡の文字のみを見て、価値ある文学とし、其余を皆無益或は有害の消閑具と見做

した旧思想は、二つの原因に依つて久しく吾国人を支配していた。第一には四民といふ階級を設けて武門が天下の政權を掌握し、所謂警察国を組織していた封建制度、第二には文献学の知識乏しく歴史の觀念が明らかでなかつた爲支那の文化を誤解して、宋以来の学説を過重したる所謂儒学思想、この二つが人生の円満なる發達、即ち文化をして稍不具なものにしてつた。

生活の一方面を強固にしやうとする爲、他の等しく必要な方面を犠牲に供したのである。然るに時運の転移は、わが國民をして終に世界の大勢に従はしめ、科学、法制、産業等を以て、旧來の慣習を破壊し、新社会の現出を促すに至つた。日本は、其の生存の爲に、時勢に適応したのである。これに適応するのを嫌う人まで、反対しながら、自然適応して来たのである。然し、まづ初めには唯僅かに生存するを以て目的とし、自覚なく自信なく、専ら焦眉の急に赴いた爲主として物質上の方面に注目して一日も早く世界の文明に追付かうと勉強した、而して今もまだ仲々此方面に努力すべきことが残っている。唯この四十有余年來の努力中に、自から氣が付いてきたのは文明の真意義である。文明とは単に物質上の福祉ばかりでない、生きもの、人間が組立て、ある社会である以上は、精神上の要求も欲望も種々様々の形で表面に現はれ、物質上の幸福と複雑な關係を結んで来る。体の糧と共に心の糧も必要である。体の糧が違つて来ると、心のそれも變じて来る。これだけをもとの儘の思想感情にして置いて、物質上の文明だけを採用しようとするのは到底不可能である。然しこの消息は少數の先覚者を外にして殆ど一般民衆に顧られず、殊にこゝ二十年ばかりの反動時代に於て、この自明の理

が沈黙してゐた。唯近時青年男女の思想と感情とに於て、これが事実となつて現はれた爲、旧思想の徒が今更ながら驚愕する。青年は思索して新思想に赴いたのでは無い、新社会の自然なる兒として生まれながらに新しいのである。學術と法制と經濟とに依つて新らしくせられた社会が、封建の余風に浴した旧人物の期待するやうにならなうには、素より当然の事に属する。人或は晩近の文芸を以て、新思想勃興の大原因とするが、文芸はまだ仲々以て、さほどの勢力は無い。直接に外国語から世界の思想に接しうる者は極めて少数である。また多少新思想新気分を含んだ小説、戯曲、雜文等も出版されるが、其の売行は他の平凡月並の著書に比して數ふるにも足らぬくらい僅少である。要するに新文芸は新思想の結果であつて、其の原因では無い。成程新時代の青年は會、新文藝に接して、己が言はむと欲する所を写されてゐるのを悦ぶことはあらう。其為に益々自信を得るにも至らう。然したとひ今日のあまり多く売れもしない新文芸を悉く聚めて焚き蓋してしひ、青年をして少しも文芸に近かじめぬようにした所、新時代の兒は依然として新しい気分を以つてとし、生れて来る。新思想を悪む者は兒を生まないので一番よい、或は第二の策として科学教育、法治制度、經濟組織等を根本的に復旧し、或は放棄するのがよい。然し勿論そんな無理な事が出来るものでは無いから最上の謀としては、どうせ新しく生れて來た青年を、某自然の方向に赴かして、進化の途すがら或は多少の弊害あるを予察し、真面目な親切な教導を以て、成る可く弊少く利多き道に向かはせ、健全なる適應を遂げさせるのだ、これが文芸の社会に對する任務であらう。明治の新文芸が勃興してより早くも三十年近

からうとする今日、幾多の才人が、其性の然らしむる所とはいへ、功名富貴の道を棄てて、或は貧と戦ひ、或は誹を偲んで専ら文芸に携はつたのは、実に後世の感謝す可き所だと思ふ。此の間幾多の悲惨なる犠牲はある、憐むべき失敗もあり、勇ましくも玉となつて摧けた討死もある。而して粘りづよい者がひとまづ社会の一部より脱落して終に完全なる文化の建設に着手するのだ。今回坪内先生が久振りて故郷名古屋を訪はれ、これに對して市民の盛大なる歡迎があるさうだ、同時に又先生の率ある文芸協会のマグダ劇公演もある由を聞いて平生思ふ所の一端を陳述してみたいのは、先生は上に述べた先覚者の一人であるからである。また文芸協会の事業が社会に對する文芸の一任務を果たそうとしているものだからである。急がず、周章せず、強ひて逆らはず、而も温厚の裡、凜とした主張を藏して、健全円満なる文化の發達に資せむとする先生の事業振には粘りづよい所がある。世には一時の境遇や俗論に制せられる人と、之を制する人とがあるが、坪内先生の如きは芸術家の自信力を以て粘りづよくも、終に一世を制してゆく人であらう。

○文学博士 森鷗外氏談

「故郷（マグダ）」試演の當時より、文壇にたづさはる殆んど凡ての人によつて、或は劇を本位とし、或は文学上の見地よりして、既に論じ蓋されてゐるから、今更事新らしく云ふ可きをもない。「故郷」を以て単に新旧思想の衝突と見るのは誤りである。独逸の上流社会に於ては、劇場に自己の芸を売るものを嫌ふこと、恰も近來まで我が国に於て俳優を河原乞食と同じ、劇場出入の者を芝居物と

罵つて、同席するを耻ぢたと同堯である。独りマグダに限らず、仮令成功していても、劇に關係ある以上は、終に容れられないといふ例は、独逸の上流社会に於ては数多き事実である。我が内務當局が『故郷』の上場を禁止した理、由は、一方に旧道德、旧思想の打破と見たのみならず、更に『故郷』の内容に官吏を罵倒した文句が余りに多いので、官紀振肅を主義とする我が国の現状では此れが上場禁止の如きは止むを得ぬであらう。然かし余の如きも、常に新らしいものを探り、自分の翻訳したものが、土曜劇場等に於て実演されて居る位であるが、単に「此の如きものもある」と云ふ事を知らしむるに、何等の差支ない事と信ずるのみならず、一方に於ては一種の清涼剤になる事と思ふ。

勿論官職をはなれた森個人の考へとすれば、何故に文芸協会が屈服したのかと思はぬでもない。協会が「故郷」を撰んだのは、同じ新しい試みにしても幾分平易な、解り易いものを探る必要からであらう。實際ズーダマンの作品は、シヨアや、ハードマンに較べると判り易い。近來彼れは独逸皇帝の御覧に目度くして文壇に於ける第一人者として成功してはいるが、其の質力に於ては、ハードマンや、シヨアに比して、遙かに劣つてゐる。シヨアの如きは全然社会主義の鼓吹者であるから致し方がないが、ハードマンに至つてはズーダマンを凌ぐ次數等であるにも拘はらず、偶々労働階級の同情者であるが故に、同国皇帝からも疎んせられて居るのは気の毒に堪えない。元來我が国は勿論泰西に於ても、文学に身を委ねるものが高階級の者のみであるのは遺憾千万である。

ズーダマンは土百姓の倅であり、ハードマンは片田舎の旅館の息

子たるに過ぎない。故に兎角上流社会の事情に疎い様である。我が国に於ても、華族階級の若い人々が文学に志し、脚本に筆を染むるに至つたならば、必ず上乘のものを得る事と確信する。余談ではあるが、我が国に於ては、古いもの、方が其筋の受けが可いやうである。チョン鬻の色事や社しもを着ての濡れ事は、別に八窓敷く云はぬが、散切頭の色事は、極めて厭かる干渉を受けるに至るのである。

自分の如きも今後は独逸あたりの古いものに筆を染める考へである。畢竟古いものは感じが鈍いであらう。

#### ○巖谷小波氏談

「故郷（マグダ）」の上場禁止に關しては、先日の文芸院委員会の席上に於ても種々の議論があつた。元來、上場禁止と云ひ發買禁止といふも、其の目的は他に存するのであつて、禁止そのものは目的の爲の手段に過ぎない。然るに、今日實際の有様を見るに、禁止せられたが爲に、却つて世人の好奇心を刺激して、發売禁止の書籍は、多くの人に読まれるといふ傾向がある。之れでは手段が、目的を過るといふ事にある。当局の政策に欠点があるからである。矛盾撞着といふべきではないか。一方に於ては坪内博士を文芸功勞者として表奨しながら、他方に於ては同博士の主宰たる文芸協会の脚本に對して、上場禁止を命ずるといふが如きは、文部省と内務省との差異はあつても、均しく一國政府のなす所である以上は、幾分矛盾の感を起こさざるを得ない。「故郷」除の場合に於ても、一旦警視庁は非常に神経過敏となつた。爾來、些細なをにも注意する様に

なつた。近頃歌舞伎座で興行した「朝顔日記」に於ても、大井川の場面に至つて、良夫を恋ひ慕ふて、泣きに泣いたが為に、盲目となつた朝顔の目を癒さんとて、在來の伝説によつて、甲子の年に生まれた男の生血を得んとして徳右衛門が自殺をする。此の場合、かゝる伝説に依るは、迷信を強ゆるものであるとして、之が禁止を命じたとの噂があるが、実に無意味な事である。然かも、自殺を許してその伝説を禁ずるに至つては、自殺する理由が全然なくなる訳である。生血を得んが為めの自殺ではないか。一寸受取れぬ仕方ではあるまいか。彼の文芸院に就いて見るも、今日の状態では同院の権能の範圍があ不明瞭である。全然文芸上の元老とも云はるべき人を待遇する為のものならば、それで可い。国家が相當の敬意を表するものとして認むべきである。然れども、真に文芸を奨励し、之を取締る為のものならば、實際的権能を絶対に与へなければ不可である。文部省が八方美人主義を採つて、所謂先輩と、新進の者とを合して一団とせしめ、之を委員にしたるが如きは、職能上に於ける効果を多大に収め得る所以ではない。一層仏蘭西のアカデミーの如くに、元老として一部の文芸家を待遇するものならば、それで可い。我が文芸院の成立状態が、除りに折衷主義であるのは、感服し得ない所である。

○文学博士 幸田露伴氏談

新しい人の努力で、文壇は日に進んでいる。劇の如きも人物の改良、向上を計るといふ事が中心となつて來た。従來の俳優を別にして、独立した世界に立つといふ傾向が多くなつたとも見える。俳優

志願者が、今までは市川家、或は中村家、或は尾上家にたよらなければ、一家をなす事は出来なかつた。然るに、今日では独立して行く事も出来る。劇団開拓の時代である。既に拓かれたる畑に行く人もあり、今より拓かれんとするところに行つて新たに豊穰なる畑を造る人もある。坪内氏の如きは後者、即ち劇団の開拓者である。今後十年も経過すれば、必ず良田を得る事であらう。従つて收穫に見るべきものとあるは芽衣伯である。兎に角、中心となるべきものは人物であるから、従ふ人の人格向上を計るべきであり、世人も亦此の点に意を注ぐに至つたやうである。「故郷」に就いては、先き頃の文芸院委員会で種々の議論があつたであらうが、余は相憎し喪中で出席しなかつた。何分今の文芸院の組織では不充分であると云つて、政府が純文芸の上に立脚して、作品を云為する事も出来ない。「故郷」の上場禁止は、世間で云ふほどの大問題ではない。新聞紙などが却つて大きくしたやうな感もある。今回、名古屋で開演するといふ事は、極めて興味ある事である。

東京に於ても観客は近來余程その種類が變つて來たやうであるが、名古屋の人々が「故郷」を如何いふ風に観るかは、注意すべき問題だらうと思ふ。

○饗庭篁村氏談

坪内君とは至極懇意である。よく一所に芝居を見てあるいたが、實際坪内君は新旧共に現代の芝居に飽き足らないのみか此れをみる事が如何にも苦痛の様である。坪内君が劇の為に殆んど他の凡てを棄て、革新を図つてゐる事に就ては兎角の避難をいふ人もあ



る。けれども、若し真面目に現代の芝居を見るならば、坪内君ならずとも、遂に文芸協会を立てるの止むを得ぬに至るであらう、私が最近感じた事でもさうである。市村座の若手俳優と言へば、どうも始末に終えぬ芝居者の内でも、幾分の事理を解して居なければならぬ筈なのだ。

が先月興行した一番目「信長記異風行列」でもさうである。忠臣平手中務が諫死して、後事を娘婿の阪井右近に托す場合に、阪井は父の頸を打ち落す。元来、子として父の頸をはねるのは、敵の重圍に陥入つて、城を枕に討死をする場合に、父の頸を敵の手に渡すのが残念である。と云つて、此れをはね、自ら守護する時か、若しくは、罪人となつた父の頸を斬つて、周君の実験に供える場合に限られてゐる。処が、此れは忠臣が主君を諫むるに死を以てした苦節を鑑みず、其の頸をはねると云ふのは、甚だしき心得違ひであるから、屢々注意をしてやつた処が、単に切腹するだけでは見場が悪いからと云ふので、少しも聞き入れずに、其儘演つていたと云ふ有様である。若し内務当局が風教の上から彼此云ふならば、此んな事をこそ、充分に取締るべきである。今度の「故郷」の如きは、単に極端なる新旧思想の衝突と云ふだけで、他に何ら風教に及ぼす程の害はない。マグダは決して幸福な女ではない。マグダは既に成功の後でも、親に対しては煩悶、遣る瀬ない薄命の人なのである。「故郷」を見た人は必ずマグダに同情するであらうと思ふ。畢竟此んな処から、旧道徳、旧思想の打破とでも見たのであらう。何しろ当局の或る者の如きは、浪花節の鼓吹者であるから、劇の事などは到底解らない。先頃吉川書房から「葵文庫」と云ふものを出して、其の中に

「田舎源氏」を昔の儘の挿書を石版摺にして出版した。

然るに風教上の事から発売禁止となつた。理由は挿書の爲かと聞いて見るに、文句が悪いのだとの事であつたが、それならば、他に類似の本は幾つもあり、又従来各所から出版された「田舎源氏」は、悉く発売禁止さるべき筈だと論じて見たが許されない。終に警視庁の巡查を吉川に遣つて、本を没収しやうとしたが、相憎「葵文庫」は会員組織なので、既に全部会員に配布してしまつたので、どうする事も出来ず、当局も非常に残念だと云つたけれども、仕方なしに禁止の令を解いた。然かしい一度発売禁止したものを、又解くと云ふのは如何にも当局の定見を露骨に顯はしたもので、内務の威信にも關しやうし、朝令暮改もこうなると寧ろ滑稽ではないか。処が「葵文庫」の第二編が出たときには、配布に先だつて発売禁止の令と共に、二千部計りを没収してしまつた。当局の方針は、とても常識では判断出来ませんよ。恐らくは今度の「故郷」の上場禁止の如きも、当局が前のノラに対して等閑に附したその復仇的態度に出たのかも知れぬ。尤も前のノラは實際幾分風教を該するの恐れがあつた。若し文芸協会に或る有力な後援者であれば、充分当局に反抗することも出来るのですが、経費の点から屈服の止むなきに至つたのは同情に堪えない。それに、床次次官は文芸協会に大に同情を表して居るので、兎に角も妥協が成立したのである。

文芸協会としては誠に惜しいことである。協会の主旨を貫徹せしむるためには、富豪が銭勘定許りをせずに、少しく補助したなら立派なものになるであらう。孤城奮闘、新しい試みに依つて、劇の革新を図る協会の努力と、会員諸君の熱心とは大いに同情すべきであ

る。坪内君の一家では皆が寝食を忘れる程熱心なので、初めのうちは、近所でも家族悉く踊ったり、跳ねたりするなんて狂喜の沙汰だと罵っていました。今では其の至誠に感服して皆同情者となつてゐる。坪内夫人の如きはいつも自ら踊りの地を弾いて、娘さんや職員に研究させているのである。それに、今日では松井須磨子さんを始め、東儀君でも、土肥君でも、立派に俳優として立つて行く程に上手になつたので、単に見物人から喝采されるのみでなく、興行人側でも其の技芸を称賛してゐる。現に歌舞伎座の田村の如きは、出来るならば文芸協会の人々で、木挽町の蓋を開けて見たいと云つてゐる。尤も東儀君の家は舞樂の家であるから、幼少の時から、冠木や今様を舞台に立つて公衆の前でやつていたのであるから、音量は豊富であり、落ち着きもあつて、先天的に俳優たるの資格がある。にも拘らず、子弟の關係から、猷身的に協会の為めに研究に身を委ねて、俸給は僅かに衣食するに足るのみを以て満足し須磨子さんの如きは、毎日木綿衣を着て協会に通つて居る。

名古屋では、どちらかと云へば新派の方が受ける様であり、「故郷」は如何にも眼新らしいのと、坪内君に縁故の深い方が多い事ですから、必ず成功する事と信ずる。

### ●坪内博士の面かけ

左の手頭を袖口のところに忍ばせ、右手に本と、生徒の勤怠簿とを持って、悠揚たる羽織袴の姿を講ずる坪内博士は、百名以上の生徒の姓名を、一々誰々さんと量と重みのある聲で、一種の節調を持たして呼びながら、いざ講義となると、口を異様に動かしながら懸

河の、直訳意識を併せて講ずるところ、一寸油断をすれば、学生は何の行を講義せられているのかとマゴマゴする。仮名を附けるだけが一生懸命だ。博士自ら劇中の人となつて、放課の時刻が来て、次の時間になつても博士は依然講義を続けている▲博士の洋服姿を見た人は少ないだらう。年中殆んど羽織、袴といふ純日本式である▲それに、博士の徒歩主義は有名なもので、大久保余丁から大学まで、余程の距離であるが、決して俥には乗らない。雨の日も、雪の日も、テクテクと徒歩主義の励行である。▲博士は金銭の勘定なんか、てんで頭にないさうだ。文芸協会の公演に大阪へ行つた時、何かの費用にと金を渡すと、博士は勘定をしていたが如何も足らぬと云ひ出した。足らぬ筈はないと思つて、傍の者が檢めて見ると、博士の勘定は五円札と、十円札とが交つてゐるのを、凡て五円札並みにして勘定してゐたのだ。形の大小などは無頓着なのである▲博士が市中の散歩に出掛ける際に、た偶々夫人より買物を依頼される。品物は買つて歸へつても、夫人より値段を問はれると、一つも知らない。恬淡無欲俗境を脱して超然たる態度は、益々奥床しい所である▲人爵を忘れ、自己の生命とするところのみ向上して天爵を重しとする博士の態度は、文部省より表彰せられた當時に於て見るも明らかである▲話は餘程古いが、博士が大學を卒業して間もない事、或時神田の某学校で沙翁の「ジュリアス、シーザー」を講じつ、あつたが、見ると、博士の両足の間に、赤い汚い子犬がある。時々鼻を鳴らして、くんくんといふ。博士はそれを見て脚部を頻りに動かす。然かも講義は依然として之を続けてゐる。

以後登校毎に、必ず例の子犬を伴つて居る。之は或る日の事、美



知で母犬に離れて泣いていたのを拾ひ上げて飼育したものであるさうな。此話は当時有名なものだったといふ。

明治四十五年七月十七日

雑報●坪内博士の來名

世界的文豪坪内博士が三十年振りの帰郷

坪内博士、島村抱月、市島謙吉、関屋文芸協会幹事の一行は既報の如く昨日午前八時三十分新橋発の特別最急行列車にて來県豊橋にて本社志水主筆の迎受を受けてより昨日の本紙坪内博士歡迎号を読みつ、快談に移り博士の旧友故小出貫一郎氏の往時を語りて鈴木勲太郎氏の近状に及び丸山愿氏は予の名古屋時代の英語教師なりしとて旧氏旧友の凋落を傷みつ、談柄を転じて学の友なりし八代六郎、加藤高明、三宅雪嶺諸氏とも久しく逢はずといひ今の名古屋駅附近は予が幼時嬉戯の地にして大惣の書類は其当時随分沢山ありて愛読したるが今より見ればつまらぬものなりしと謙遜しつつ、窓を推して青田を眺めらる、程に列車は駛走して定刻四時八分に名古屋停車場に着き予てよりプラットホームに垣を築き山をつくりて待受けたる幾多の知己校友に迎へられ愉色を満面に湛えつ、挨拶を交換し用意の腕車に打ち乗つて上園町丸文旅館に投宿せり

●坪内博士來名日程

坪内博士は昨日午後四時八分名古屋駅着の特別最大急行列車にて、市島謙吉、島村抱月、関屋親次郎諸氏と共に來着して直に丸文旅館に入りたるが、滞名中の日取りは左の如し

△十六日午後坪内博士大歡迎会（商品陳列館内）△十七日午前十一時坪内博士主催の市内各新聞通信社及び支局演芸記者招待会（偕楽亭）△十七日午後六時坪内博士島村抱月両氏の講演会（県会議事堂）△十八日午前十時劇談会主催の博士一行歡迎会（伊藤呉服店）△十八日午後六時早稲田大学校友会歡迎会（偕楽亭）△十九日文芸協会故郷劇を見て二十日帰郷

●坪内博士と劇談会

招待會と西川流の舞踊

今回文藝協會公演の「故郷（マゲダ）」劇に就て久し振に故郷の名古屋に帰られたる坪内士の爲め当市劇談会は明十八日午前十一時三十分より同博士一行を栄町伊藤呉服店内くれは俱樂部に招待し午餐會を催ほし余興として西川石松師匠も歡迎の意を表して各連妓中の粹を萃めたる名取連妓の舞踊「俄仙人」を演ずる筈なるが其の出演者は左の如し

▲立方 仙人（西川小玉）晒男（西川小■）晒男（西川長吉）晒女（西川金吾）晒女（西川小染）▲地方 三味線（美濃家小友）同（末広家小鈴）同（福岡■照子）

●「故郷」劇の前景氣

坪内文學博士主宰の文芸協會「故郷（マゲダ）」劇公演は愈よ來る十九日より御園座に開演する事となりたるが同劇は東京、大阪、京都にて各十日間公演せしに到る所非常の好評にて満場メ切を呈したる素晴らしき景氣なりしが当地公演は僅かに五日間のことなれば

各新聞社、前茶屋其他にて入場切符の売行き非常に多く今や予定数に達せんとするの盛況なれば売切とならざる内求め置かるべし同劇は極めて六ヶ敷劇と思ふ人々多き様なれど通俗的に書き下しあれば何人にも面白き劇なりと因に入場料は左の如し

特等 一円二十銭△一等九十銭△二等六十銭△三等三十五銭△四等二十銭

明治四十五年七月十八日

●文芸協会招待会

一昨日來名したる坪内博士並に文芸協会の幹事島村、関屋、池田三氏は協会代表して昨日午前十一時より市内東区富沢町偕樂亭に於て市内各新聞通信社演芸部記者を招待し主客十余名の一座にて午餐の旁ら談話を交換せしが坪内博士先づ文芸協会來演の次第を簡単に述べ次で島村抱月氏「故郷（マゲダ）」劇を初めて東京有樂座に上場して以來改訂の始末、京阪各地公演の次第を詳細に談ずる処あり夫れより主客打混じて劇談、舞踊談、脚本談など盛んに出て暑氣をも忘れて清話に耽り午後一時半退散したり。

明治四十五年七月十八日

●「故郷（マゲダ）」劇の評判

文芸協会の「故郷」劇は明十九日午後六時より御園座に於て公演せらる、筈なるが同劇は曾て内務省の干渉ありたるより世間にては同劇の主人公マゲダを新しい女で極めて突飛且つ軽薄な女の如くに誤解するものもあるべけれどマゲダは必ずしも新しい突飛な女にあ

らず從來在來りの女にて只世界的情理を現はす處などを新らしとすべく何分にもズーデルマンの傑作とて容易に見られぬ劇なり特に其筋は極めて単純にして誰にも判り易くして彼の有触れたる文士劇の如く理屈張りたる六ヶ敷ものにあらず新劇中の新劇として最も條理一貫し趣味に富める面白き劇なれば従つて舞台上の土肥春曙、東儀鉄笛諸氏以下極めて真面目なる態度の裡に言ふに言はれぬ妙味を現じ從來の芸術家も跣足で逃げ出す思ひあり特に松井須磨子に至ては実に天下の一品にて其容姿といひ其芸術といひ見るものをして心醉せしめ知らず識らず恍惚たらしむるものあり定めて連日の好評を博し來るならん

●故郷劇の切符と絵端書

明十九日より御園座に於て公演せらるべき「故郷（マゲダ）」劇入場券は当日木戸にても発売せらる、も何分入場者非常に多かるべき見込まれば混雑を來すべきにより目下取次売捌中なる市内四新聞社、名古屋通信社、伊藤呉服店、桔梗屋呉服店、中井洋紙店、中京堂、静觀堂及び御園座前茶屋に就き予め買ひ置かる、事便利なりと又故郷劇の絵端書は五枚統にして中京堂其他各書店に販売しつ、ありと

明治四十五年七月十九日

●「故郷（マゲダ）」劇の景氣

今十九日より御園座に公演すべき文芸協会劇「故郷」は最初より好劇家の注意を惹き入場切符の売行は却々盛なるが一昨夜県会議事

堂に於ける坪内博士一行の講演会に依り故郷劇の真価値が分明となりたる結果昨朝来の切符の売行及び前茶屋へ場割の申込続々たるが御園座に於ては昨日道具及び電燈調べをなし総ての準備整頓したり入場料は特等一円二十錢、一等九十錢、二等六十錢、三等三十五錢、四等二十錢なりと

●文芸協会員招待 名古屋劇談会の伊藤呉服店に於ける歓迎

名古屋劇談会は既報に如く目下來名中なる坪内文学博士並びに文芸協会員一行の歓迎会を昨日午前十一時より市内中区栄町という呉服店くれは俱樂部に於て開催したり。主人側は劇談会員の外に坂本彰之助、伊藤守松氏等臨時会員数名加はり、定刻主客打揃ふや先ず食堂を開一座四十余名は食卓を俱にし月番幹事青柳有美氏は博士並に一行を歓迎するの次第を述べ、坪内博士は簡単に謝辞を為し談笑の間に食事を終え、一同席をくれは俱樂部に移して陳列せる盆栽草花類が自ら裝飾となりて眺めす、しく扇風機の涼風習々たる処にて待つ間程なく舞台の幕は徹せられて西川石松門下の余興舞踊は始められたり。第一『朝妻船』は西川花子の素踊にて得意の舞振りを見せ、少憩後第一『俄仙人』（西川小玉、同小稲、日出吉、同金吾、同小染）は名取連中の名手を揃へたる上曲は博士の作なれば一層興味を添え博士始め一行も大満足の様子にて観覽せしが余興終わるも興は尚ほ盡きず三々伍々室内に閉鎖して清談に耽り午後三時頃少年音楽隊吹奏の裡に散会したり。当日接待に応じて出席せる一行は左の如し

坪内博士、島村抱月、東儀季治、土屋春曙、國屋親次、池田銀三

郎、松井須磨子、林千歳子、和泉房江子、都筑道子、三樹永造、佐々木積、西原勝彦、戸田猿仁、横川唯治、森英治郎、泉新一諸氏外数名

明治四十五年七月二十日

演芸 ▲御園座 同座に於ける文芸協会の「故郷（マグダ）」

劇は愈々昨十九日午後六時半より開演したるが人氣沸くが如き評判の新劇とて開場前より観客轟々と詰掛け来り。忽ち木戸メ切の盛況を呈したるが当市劇界の記録を破りし演劇とて観ざるを耻とする好奇心もあれば連日とも盛況を見るならん

●坪内博士と大惣

坪内博士が少年時代に通はれて、博士が今日の劇を起す■ともなつたと云ふ市内西区島田町の貸本屋「大惣」の家の人を訪ふて、博士の帰往の事ども色々聞いて見た（一記者）

坪内さんの事に就きましては、宅の主人が今、存命なれば、面白いお話しも御座いませうが、もう十五年も前に此世を去つてしまひまして、私共ではしつかりした事が申上げられません。それに昨年私の宅の昔からの雇人が死にましたから詳しいことは知りません。かう云ふ事でしたら、私達もよく皆の存命中に、詳しく聞いて置けばよかつたと思ひます。然し当特別に気にも留めず、耳に挟んだ事を考へ合して見ますと、坪内さんの初めて私の宅へ本を借りにお出でになつたのは、まだ十四五才の時で、短い袴をつけて名古屋英語学校へ通学なされた時分の事なのです。さうしてその時代は瓦

町の兄さんの家にお居でなつて、學校へ通はれたのですが、肝心の學科は餘り熱心ではなく、反つて私の宅の本の方へ精力をお籠めになつたやうです。毎朝屹度通學の途次、私の宅へ立寄つて一冊宛本を持つて、學校でも大方それを読んで居られたやうです。さうして図書館へでも來るやうに、私共へは怠らずお通ひになつて、半日位は屹度お居でになる。もう自分自身でずんぐと土藏へでも這入つて行つて、好きな本を引つ張り出してはお読みになつて、時とすると座布団などをお持參で土藏の中へ座り込んで、一生懸命に讀書をなさつたやうです。その時分から真面目な、自分の思つた事には、飽く迄研究しなければやまないと云ふ熱心な方なものでしたのせう。さうして読み方も人一倍に早かつたのですが、お読みになつた本は大約三四千の數に上ります。古い帳面が今残つて居りますと、初めどんな本をお読みになつたか、すつかりと判りますのですが、これとて、類火に逢つて焼けて了ひましたので、一向お話しもできません。先づお読みになつたのは、初めは馬琴や、何かの小説類であつたやうです。それからふと近松か、何かの浄瑠璃本を手にされてから、心が變つたやうに、其後は専ら浄瑠璃本をあさつて、一向専心に其方に進まれ、私の宅の浄瑠璃本、演劇の丸本根本は殆んど全部と云つてもいい、位悉く読み破られたやうです。この時代から演劇と云ふものが、坪内さんの頭の中に芽をふき出して、だんだんに根を広げて行つたのでせう。自身にもその時この演劇に就て、將來は充分なる研究がして見たいと云つてゐられたと聞きます。東京へお出でになつても、時々本を私の宅からお送りをいたしました。少年時代の事はそれ位しかお話しはできませんが、宅の主人が

死にましてから、この店も愈々やめる事になつた時の事です。

それは去る明治三十三年の事ですが、閉店する事を坪内さんの方へお知らせいたしますと、坪内さんは急に東京からお出になつて、私共を訪ねられ、何を云つてもこれだけ沢山の本を置いて廢業するのは惜しいと云はれました。それでも私共の方では親類が一時廢業するやうに申しますから仕方がありませんと云ひますと、頻りにこの本が惜しい本が惜しいと云つてゐられました。勿論今日の坪内さんで御座いますれば、或はあの時自身のお好みの本だけを、すつかりとお買取りになつたかも知れませんが、まだその時分は、坪内さんもそれだけの考へも出ず、早稲田の學校も生徒の少なかつた時でしたので、それ限りに終りましたが、その時でした、矢張り裏の土藏の内へお這入りになつて、埃だらけの中も厭ひなく座り込んで、棚に重ねられた本を引出して読んだり、又中学時代に且て読んだ浄瑠璃本を列べて見て、昔の事を追想して、感慨に打られたやうです。その時は無論、五六■当地におゐでになつてお歸りになりましたが、それからもう十二年になります。さう云ふ訳で宅の息子も坪内さんのお世話になつて居りましたが、兼々坪内さんは中学時代に読んだ丸本や、根本が今日の劇の思想を私に起したと、さう云つて居られるさうで、私共の本が役に立つて、今日の立派な方になられたと思ふと、どんなに嬉しいか知れません。

今度は久し振りでお歸りになつたのですから、宅で歓迎会を開きまして、丁度昔馬琴の書いたものが御座いますから、これに對して何にか坪内さんに書いて戴くつもりです。兎に角、坪内さんは中学時代から、劇と云ふものには誠心誠意、熱心な研究をなさつたので

す。先頃支那の樂器を甘く劇に應用したいなんて云つてゐられたさうですから、之も或は實現されるか判りません云々。

明治四十五年七月二十一日

●再び「故郷（マグダ）」劇を観る 青波（抄録）

女主人公たる松井須磨子氏のマグダは頗る好い。オフエリヤで認められずノラで認められマグダで更に認められた径路から見ても、須磨子氏の柄がノラ又はマグダの如き性格の女に適っている点もあるだらうが、第一熱心なる練習、第二巧みなる表情、第三透徹なる声調が此人唯一の武器である。同氏が監督の指揮を忠実に守り自らも工夫に熱心なことは夙に聞く処だが、舞台上の其人を見た丈でも顔面の表情―特に眼の表情に巧みで興奮した状態、軽快な気分になつた状態等、一に此の眼の表情で現はし方を強うする。次にその声調は女性には珍しい量のある透徹したもので、白の抑揚緩急が自由自在であるのが、頗る役を引立たせる。若し之れに加ふるに一層妖艶な姿であつたら、いかに其のマグダは今の評判以上に天下を騒がせたことであらう。然し彼れ丈でも立派なマグダである。須磨子の劇壇に於ける地歩は確かに認められたが、之を以て直ちに天下第一の女優と崇めて了ふのはどうであらう。従来は比較的柄に合つた役ばかりで順調に発達して来たが、此の外に母としての愛情、処女としての情緒―特に日本の社会劇に於て日本人としての女の情緒を現はし來るべき役々に於て、果してマグダ同様の成功を示すか何うか。其の上でなければ未だ容易に極附といふ訳には行かない、更に一層に努力を望まざるを得ない。土肥庸元氏の中佐シユワルツェは

冷笑的の態度だとの評もあつたが、自分はさう認めない、旧思想で身体も精神も固められた非職軍人で寧ろ大真面目であつた。特に右手の痙攣を現はすとして指を屈めて震はすなど用意の細かい処を見る。東儀季治氏の參事官フォンケラーは、東儀氏其の儘の態度で輕妙に演じ新派劇なら態となるべき色敵を洒々落々に演て退け然も輕浮なる才子肌を描し出したは流石に枯れた腕といふべく所謂冷笑的の態度は此の役に認められた。佐々木積氏の牧師ヘフダーディングは所謂儲け役の代りに難役だが、熱心に演じて風采から音調から道德的調和に腐心なる牧師氣質を能く描した。役柄として白を單調にいふの已むを得ないが音量も十分あつて、マグダとの對話のあたりは見事なものであつた。林千歳氏の妹マリイは美しくもあり可憐に出來て、恋を知つて恋に溺れぬ処女の稚態がよく現れた。和泉房江氏の後妻アウグステは淑やかな夫人で夫と娘との衝突に介しても只おどおどする女であつた。都筑道子氏の伯母フランチスカは世話好きの伯母さんでマグダと逢へば何といふ事なしに意氣の合はぬ人が、巧みに出來て態とならぬ処に妙味がある。林長三氏の中尉マックス、率直な軍人氣質でマリイに対する愛情に深いところは能く描かれていた。

明治四十五年七月二十三日

●坪内博士の帰京

十六日帰郷以來滞名中なりし文學博士坪内雄藏氏は昨夜十二時十分名古屋発の列車にて帰京の途に就けり

●各興行の遠慮

天皇陛下御不例に付き謹慎の意を表すべく其筋の注意に依り市内の各劇場寄席全部は御遠慮申上げ昨日より休業せり。

明治四十五年七月二十九日

●肉体の故郷（一） 坪内博士故郷太田に帰る（抄録）

・三十年振りに心の故郷たる名古屋に帰った坪内博士は、肉の故郷たる美濃国加茂郡太田村にも帰って嘗てありし邸宅に跡を少し迷ひながら、四十四年以前の追憶に身も心も満たされたる一日を費やしたのである。名古屋へは公然に帰った坪内博士は、肉の故郷太田町へは、極めて秘密に帰った。去る二十一日の朝、博士と余とN君との三人は、美濃の太田に行くべく、笹島停車場に向かった。午前六時二十八分神戸行の急行列車に乗った三人は、当時公演中の「故郷」に劇に始まり、之に対する博士の意見、余とN君の批評、さては上演禁止問題などで話は尽きなきい。

・列車は岐阜停車場に着く。駅前から電車に乗って柳ヶ瀬まで乗り換えた。「美濃町ゆき」の電車に三人が腰を下したのは、午前七時三十分であつた。オペラグラスを今にも落しかけて、少々驚いた余は、之を坪内博士に渡すと、博士は左手に見える金華山頂の模擬城をレンズに写して頻りと眺めていたが「実に俗悪なものだ」と批評の下に眼は再び車中に帰った。関までは一時間電車に乗っているのである。

・関から太田まで三里余である。この間をガタ俵に揺られてのか

と幾分心掛りであつたが、幸いにもゴム輪の俵があつた。博士を先きにして、三台の俵は関町を通り越して田舎道を走つて行く。（愛泉）

明治四十五年七月三十日

●肉体の故郷（二） 青波（抄録）

・昔宿場であつた太田町も今は寂れて廃墟の影をやどしているかと思つていた余は、その想像の当たつていなかったのに驚いた。なかなか隆盛である。磯谷旅館というのは、坪内博士が幼見より覚えている家である。現在尚営業を続けているので先ずその家に入つて休憩をした。

・一通り街を見ようというので、四十余年以前、尾張代官所であつた当時に事を知っているものを案内に頼もうとの事で、宿の女中の周旋で渡辺吉太郎とかいう六十歳位の頑丈な爺さんが来て呉れた。田宮如雲に仕えていた事のある人だ。此の人を案内者として、博士と余とN君とは宿を出た。行く道々、幼き時代の記憶を臚げに辿りながら、お爺さんに色々の事を尋ねては、その返答を待ちかねるようにして、坪内博士は耳を傾けていた。博士の知っている人、且つはその屋敷に仕えていた人などは、凡て亡きものとなつてゐるのを聞いて、博士は「今十年早く帰つたならば最う少しく事情も解つて興味もあつたらうに」と幾度か繰返していた。



明治四十五年「新愛知」掲載の逍遙関連記事一覧

○講演関係

逍遙の講演

- 七月十九日 「何故に新しき劇を必要とするか」(一)
- 七月二十日 「何故に新しき劇を必要とするか」(二)
- 七月二十一日 「何故に新しき劇を必要とするか」(三)
- 七月二十二日 「何故に新しき劇を必要とするか」(四)
- 七月二十三日 「何故に新しき劇を必要とするか」(五)

島村抱月の講演

- 七月十九日 「舞台上のマグダ」(一)
- 七月二十日 「舞台上のマグダ」(二)
- 七月二十一日 「舞台上のマグダ」(三)
- 七月二十二日 「舞台上のマグダ」(四)

○劇評・梗概

- 七月十二日 「文藝協会『故郷』劇の梗概」(一)
- 七月十三日 「文芸協会『故郷』劇の梗概」(二)
- 七月十七日 文芸 「マグダの悲哀」

- 七月十九日 「『故郷』に就て」 文芸委員 伊原青々園談
- 七月十九日 「マグダに就て」 静一(上)
- 七月二十日 「マグダに就て」 静一(中)
- 七月二十一日 「マグダに就て」 静一(下)
- 七月二十二日 「『故郷』劇と其教訓」 青波(上)
- 「再び故郷劇を見る」 青波
- 七月二十三日 「『故郷劇』とその教訓」(下)

○広告

- 七月十三日 「坪内博士島村抱月講演会」
- 七月十四日 「坪内博士島村抱月講演会」
- 七月十五日 「坪内博士島村抱月講演会」
- 七月十六日 「坪内博士島村抱月講演会」
- 七月十七日 「坪内博士島村抱月講演会」
- 動向その他

- 七月十一日 「坪内博士歓迎會」
- 七月十四日 「故郷劇は御園座」
- 七月十五日 「御園座の『故郷』劇」
- 七月十六日 「坪内博士を迎ふ」
- 「文藝委員の見たる坪内博士と『故郷』」
- 上田敏、森陽外、巖谷小波、上田万年、饗庭篁村、徳富蘇峰

- 七月十七日 「坪内博士の面かげ」
- 「坪内博士采名日程」
- 「坪内博士の采名」
- 「坪内博士と劇談会」
- 「『故郷』劇の前景気」
- 「文藝協会招待会」
- 「故郷劇と絵葉書」
- 「『故郷』劇の評判」
- 「『故郷』劇の景気」
- 「文藝協会員招待 伊藤屋呉服店」

七月二十日 『坪内博士と大惣』

演芸 御園座

七月二十三日 「坪内博士の帰京」

「各興行の遠慮」

七月二十四日 「歌舞音曲遠慮」

七月二十九日 「肉体の故郷」(一)

七月三十日 「肉体の故郷」(二)

※本資料は文部科学省「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」

(A09351900)平成二十三年度「坪内逍遙遺文の網羅的

収集調査と紹介に関する研究」(研究代表者…松山薫)による研

究成果の一部である。